

北部九州における弥生時代のイエとムラ

小郡市埋蔵文化財調査センター 山崎頼人

1.はじめに

北部九州地域における弥生時代の住居構造や集落構造については、特に集落構造を中心に古くからの調査研究の蓄積がある〔鏡山1956～1959、高倉1975、橋口1987、武末1990など〕。集落構造研究については、良好な調査例（大規模開発）によるところが大きいが、近年では小規模調査の積み上げによる集落構造・変遷理解も進んでいる〔小澤2000、久住2008〕。また、蓄積された資料から、集落研究の基礎的遺構である住居遺構についても地域単位での変遷、地域性が明らかにされつつある〔寺井1995、埋蔵文化財研究会2006、山崎・沖田・廣木・柿本2008など〕。

2. 竪穴住居構造の変遷

北部九州地域（主に福岡県域）では地域性や遺跡毎の特徴がみられるものの、大きく以下の住居変遷が考えられる（第1～3図）。

第1画期：松菊里型住居の流入（弥生早期～前期前半）

第2画期：松菊里型住居の変容・在地化（弥生前期前半～中期末（一部後期初頭））

第3画期：方形系住居の増加・盛行／円形系住居の減少・衰退（弥生中期末～後期初頭）

第4画期：住居構造の画一化（方2柱・壁際土坑・ベット状遺構の付設）（弥生後期段階）

第5画期：主柱構造の変化（方4構造の採用・流入）（弥生終末～古墳時代初頭以降）

3. 集落の様相

ここでは主に集落内における住居の状況と貯蔵・倉庫管理についての変遷を示す。

弥生時代早期から中期前半では、貯蔵穴・倉庫の管理体系が小規模・自己完結的な小集団であり、それぞれの居住単位で貯蔵施設を維持する基本的な生活領域が形成される。

江辻遺跡では、弥生時代早期から前期の環状に配置された松菊里型住居群とその内包される部分に掘立柱建物、さらにそれら両者を取り巻くように溝がめぐる（第4図）。明確な貯蔵穴は調査区内にみられず、貯蔵施設・倉庫としては掘立柱建物が見られる。当初の中央部は広場になっていて、掘立柱建物が7棟建つ。うち1棟は、梁行4間×桁行5間の平屋建物と推定され、この集落の公共的な大型建物とも考えられている。

一ノ口遺跡Ⅰ地点では、弥生時代前期後半から中期前半の住居跡119軒の他に、掘立柱建物4棟、貯蔵穴279基、道状遺構7条、柵列状ピット群などが検出された（第5図）。全時期を通して、円形住居は径5～6mが大半を占め、7m以上のものが16軒（うち1軒は11mを超える）である。方形系住居は長辺3～5mが多く、6mを超えるものもある。円形住居は丘陵頂部、もしくは尾根部に立地し、方形系住居は円形住居に付随、もしくは斜面上に立地する傾向が強い。貯蔵穴は住居周辺に伴う形で検出される。周辺では、貯蔵穴には住居周辺につくられるものと住居から離れた場所にまとまりを持つ2者がある。その群をなすものには環濠を有するものがある。貯蔵穴専用環濠は、周辺の集団が協力して掘削したと考えられ、小集団間を超える貯蔵域の創出が行われ、管理集団の萌芽がみられる。そのようななかで、大規模集団では集落内分業の集約化が一部確認できる。

中期後半から後期では、居住単位の基本生活領域を持ちつつ、集落内における特定貯蔵域・倉庫域・生産域の明確化（集落レイアウト）が看取できる。機能集中・集住化することで集落大形化が促され、集落経営が長期的・安定的なものになる。

比恵・那珂遺跡群では中期後半以降、段丘上を区画する大溝が掘削される。大溝は集落のレイアウ

トの基軸で、環濠とはならない。中期末には、那珂遺跡の大溝の西北側に中央に屋内棟持柱を有する5×8間の大形建物がみられる。周囲では青銅器铸造関連遺物が多く、前面の大溝に祭祀土器群が集中し、青銅器生産と祭祀行為とが関連して執行された〔久住2008〕。比恵遺跡中央部では、径11m以上の大形円形住居を有する住居群ブロックがあり、周囲には径9~10mを中心とするブロックが分布する(第2図)。「ブロック」は大形・中形の円形住居、7m以下の中・小形長方形住居、掘立柱建物、井戸からなる径100~200mの居住単位である。中・小形住居のみのブロックもあり、集落内での階層性を示す可能性がある〔吉留1999〕。

後期における比恵・那珂遺跡群は方形環溝(大形建物)を中心とする「中枢域」や比恵遺跡の中央北部における倉庫群の成立など、より機能的に再レイアウトされる(第6図)。集落の再編成に伴い、新たな条溝(大溝)が各所で掘削され、比恵・那珂遺跡群の段丘上を機能的に、ブロック状に区画する。弥生時代終末期には、比恵・那珂遺跡群を南北に貫く、全長1.5km以上の長大な道路状遺構の成立があり、集落の新たなレイアウトをきめる基幹道路となる〔久住2008〕。

平塚川添遺跡では後期後半以降、多重環濠を伴う(第7図)。その中心部には大形建物が並び、その周囲には環濠によって区画された別区を有する。この別区のなかには工房域や倉庫域と想定されるものがあり、集落構造での機能分化が窺える〔川端1994〕。

【主要参考文献】 小澤佳憲2000「弥生集落の動向と画期 福岡県春日丘陵域を対象として」『古文化談叢』44
鏡山猛1956~1959「環溝住居址小論(一)~(四)」『史淵』第67・68、71、74、78 川端正夫1994『平塚川添遺跡 発掘調査概報Ⅱ』甘木市教育委員会 久住猛雄2008『福岡平野 比恵・那珂遺跡群 列島における最古の「都市」』『集落からよむ弥生社会』弥生時代の考古学8同成社 高倉洋彰1975「弥生時代の集団組成」『九州考古学の諸問題』東出版 武末純一1990「北部九州の環溝集落」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集 寺井誠1995「古墳出現前後の竪穴住居と形態変化 漸移性と画期」『ムラと地域社会の変貌 弥生から古墳へ』第35回埋文研究集会 橋口達也1987「集落立地の変遷と土地開発」『東アジアの考古と歴史』中 岡崎敬先生退官記念事業会 埋蔵文化財研究会2006『弥生集落の成立と展開』第55回埋文研究集会 山崎頼人・沖田正大・廣木誠・柿本慈2008『松菊里型住居の変容過程 筑紫平野北部三国丘陵における住居動態』『古文化談叢』59 吉留秀敏1999『福岡平野の弥生社会』『論争吉備』考古学研究会

三国丘陵における住居変遷図	内円柱有蓋型(左)		内円柱有蓋底(右)		外円柱有蓋型
	中柱式	外柱式	中柱式	外柱式	
縄文時代後期					
良代Ⅰ式(一期)	○○○	○○○			
良代Ⅱ式(二期)	○○○	○○○			
板付Ⅰ式(古)	○○○	○○○	○○○	○○○	
板付Ⅱ式(新)	○○○	○○○	○○○	○○○	
板付Ⅲ式(古)	○○○	○○○	○○○	○○○	
板付Ⅲ式(新)	○○○	○○○	○○○	○○○	
板付Ⅳ式(古)	○○○	○○○	○○○	○○○	
板付Ⅳ式(新)	○○○	○○○	○○○	○○○	
板付Ⅴ式(古)	○○○	○○○	○○○	○○○	
板付Ⅴ式(新)	○○○	○○○	○○○	○○○	
板付Ⅵ式	○○○	○○○	○○○	○○○	
城ノ越式(古)	○○○	○○○	○○○	○○○	
城ノ越式(新)	○○○	○○○	○○○	○○○	
須佐I式			○○○	○○○	
須佐II式			○○○	○○○	

【例】左はそれぞれの柱芯式(右斜)のなかでの山手表示した図。右(+)には、2008年3月時点の集成図を記す。

※松原遺跡生土塗瓦工式まで、その時は須佐I式までを記す。

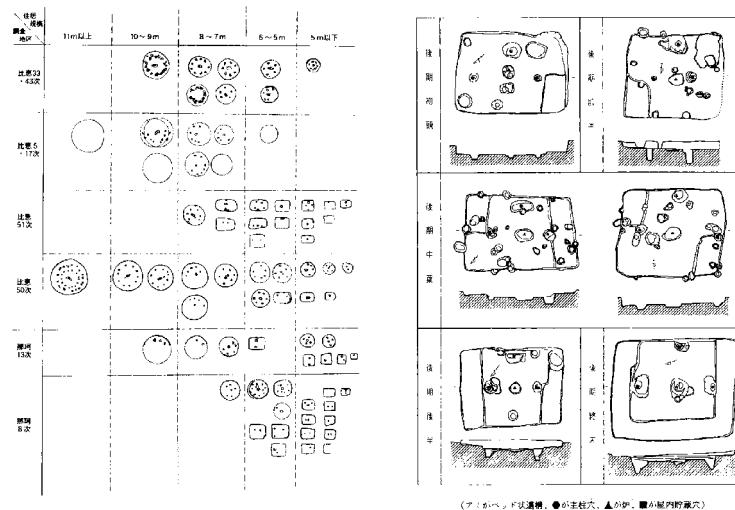
	小判円形	方形	高脚柱複数柱	小判型
縄文時代後期	○	□	□	
良代Ⅰ式(古)板付		□	□	
良代Ⅰ式(新)板付	○	□	□	
板付Ⅰ式(古)	○	□	□	
板付Ⅰ式(新)	○	□	□	
板付Ⅱ式(古)	○	□	□	
板付Ⅱ式(新)	○	□	□	
板付Ⅲ式(古)	○	□	□	
板付Ⅲ式(新)	○	□	□	
板付Ⅳ式(古)	○	□	□	
板付Ⅳ式(新)	○	□	□	
板付Ⅴ式(古)	○	□	□	
板付Ⅴ式(新)	○	□	□	
板付Ⅵ式	○	□	□	
城ノ越式(古)	○	□	□	
城ノ越式(新)	○	□	□	
須佐I式	○	□	□	
須佐II式	○	□	□	

※+は、集成対象外のものから認定。

*注釈欄裏面の数字は、一ノ口(16)、北松原遺跡からの算出。

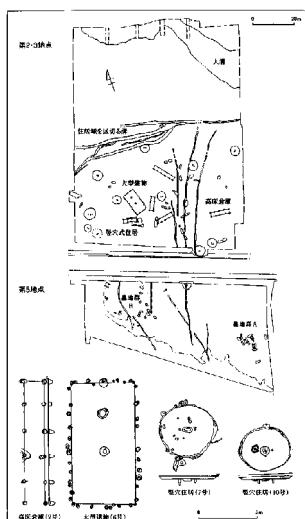
図2(2) 三国丘陵における住居変遷図

第1図 三国丘陵における住居変遷概念図(弥生時代前半期)[山崎・沖田・廣木・柿本2008]

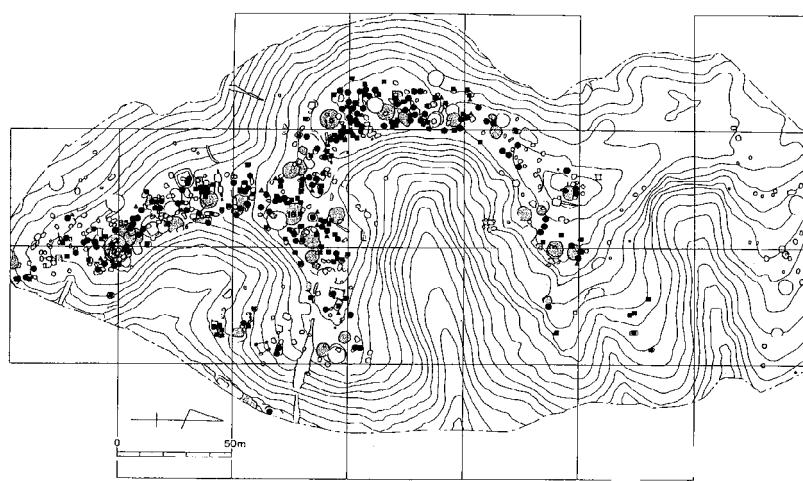


左：第2図 比恵・那珂遺跡住居規模
(中期後半)[吉留1999]

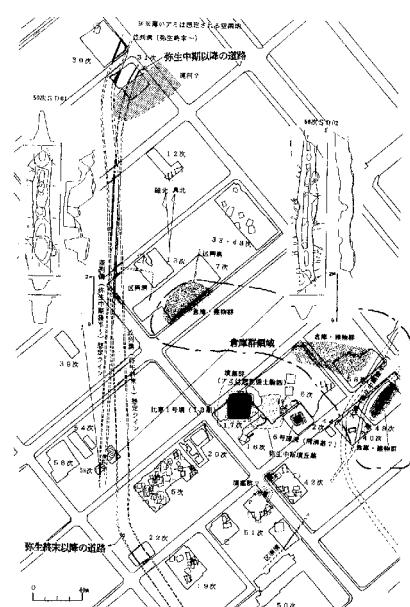
右：第3図 弥生後期住居変遷図
[片岡1996]



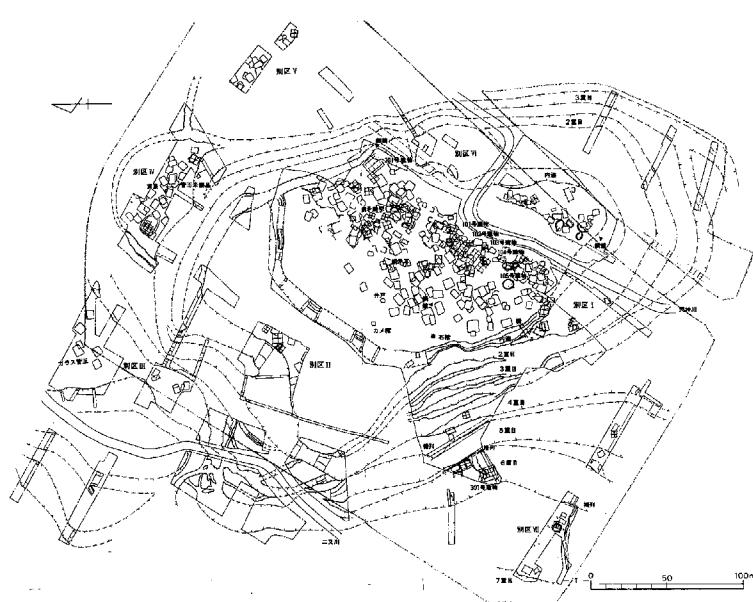
第4図 江辻遺跡遺構配置図
[武末2000]



第5図 一ノ口遺跡遺構配置図 [速水1994]



第6図 比恵遺跡遺構配置図
[久住2000]



第7図 平塚川添遺跡遺構配置図 [川端1994]